英語教科書
―異質性との出会いの場

北川達夫（日本教育大学院大学）

英語の教科書は，生徒にとって異質性との出会いの場である。いや，異質性との出会いの場でなければならない。

なぜ異質性との出会いの場でなければならないのか。第一に，異質性と出会うことにより，自分自身をより深く知ることができるからだ。

生徒は英語の教科書において，英語という異質な言語と出会う。たとえば，その日本語とは異なる文法構造と出会うとき，それは英語の学びであるのみならず，日本語を客観的にとらえる視点の獲得でもある。英文法を学んで初めて，主語や述語という概念を実感するのではないだろうか。これまで無意識かつ習慣的に使っていた日本語が，英語の学習を通じて「言語」として認識されるのだ。

教科書のテキストにおいても，生徒は異質性と出会うことになる。たとえば，世界には，幼いころから武器を手にとり，地雷を埋めて敵と戦う子どもたちがいる。そういった子どもたちの存在を知ることも重要だが，同時に自分自身の置かれている現状を客観的に思い知ることもまた重要なのである。

日本文化を英語で紹介したテキストを読むとき，「こう言えば通じるのか！」あるいは「こう言わなければ通じないのか！」という驚きとともに，彼我の違いを実感することだろう。異質な他者に対して，自分自身のことを説明するための秘訣がそこにある。それはまた，自分自身について深く知ることでもあるのだ。

いま「驚き」という言葉を使ったが，これこそが「異質性との出会いの場でなければならない」第２の理由である。異質性との出会いは驚きを生む。だから異質性が必要なのである。

アメリカの海洋生物学者レイチェル・カーソンは「sense of wonder（不思議さに驚く感性）」こそ，自ら学ぶ姿勢をつくるものであり，学びの基礎であるとしている。英語の教科書で，英語そのものの異質性，そしてテキストに含まれる異質性と出会うことによって驚き，「これは何だ？／どういうことだ？／なぜだ？」と疑問を抱くとき，生徒は自ら調べ，自ら考えるようになるのである。

昨今のグローバル化する社会においては，異質な人々ともコミュニケーションを成立させ，人間関係を構築していく必要がある。その場合も，センス・オブ・ワンダーは重要である。信念や価値観の異なる相手の主張，つまり自分にとって異質な主張を聞くと，往々にして「それは絶対に間違っている」と受け止めがちだ。だが，そういった反応から闘争は生まれても，理解や協働は生まれない。だから，異質な主張に対しても，まずは「ほう，そういう考えがあるのか！」と驚きをもって受け止め，自分が理解できないことについては「それは何か？／どういうことか？」，納得できないことについては「それはなぜか？」と質問していかなければならない。こうすることで，世界中のどこの，だれの，どのような主張に対してもコミュニケーションを成立させ，最低限の人間関係を維持することができる。これは，地球において多様な（あるいは互いに異質な）人々が共生していくうえで，必要不可欠な技能といえるだろう。

英語の教科書は，生徒にとって異質性との出会いの場でなければならない――自分自身について深く知るために，自ら学ぶために，そしてこれからの地球で共生していくために。